
ファイアーエムブレム ~ 朱と蒼の黎明 ~

百合斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファイアーエムブレム 〽朱と蒼の黎明〽

【Nコード】

N 4 2 4 3 F

【作者名】

百合斗

【あらすじ】

テリウス大陸の遙か東、死の砂漠を越え、幻の王国ハタリすらも越えた、その先に広がる大地に見えるは戦乱の世。そこで生きる一人の青年は西からやってくる蒼髪の青年と出会い、生きる意味を探す。

第一幕 傭兵とは（前書き）

この話は「暁の女神」の後の話です。
もっとも、ほとんどのひとは出ませんが……

第一幕 傭兵とは

「……外が騒がしいな」

男が苛立ち気に呟いた。

野宿を何日も続けてやっと辿り着いた村の宿屋の世辞にも柔らかいとはいえないが久し振りであるベッドで昼間から情眼を貪^{むさぼ}っていた男は窓の外から聞こえてくる騒音に目を覚ました。

面倒臭げに起き上がった男はベッドの脇に置いていた槍を手に取りながら窓から外の様子を窺^{うかが}った。宿屋二階の窓から出した男の紅顔に照り付ける様な太陽が当たり、男は眩しそうに眼を細めた。

雲一つない澄み渡る青空には不釣り合いな黒煙が村のあちこちから上がるのを男の緋色の双瞳が捉える。

「こんな辺境までバロム帝国の兵が攻めてきたのか？」

男は全く動じた様子を見せずにただ苦々しげに寝癖だらけの橙髪を乱暴に掻く。

「町で聞いた話だとまだ、だいぶ南の方を進攻していると聞いたんだがな」

寝起きで鈍った身体を軽く動かして覚醒させながら男は逃げ出す準備をした。すると、部屋の窓の下方から女性の絹を裂くような悲鳴が部屋の中まで響いてきた。

「ああゝもゝ、うるさい、うるさい」

女性の甲高い声に両耳を塞いで顔を歪めながらも、窓から下の様

子を覗く男。

そこでは

「女、黙って俺達に従え！！」

「やめてください！　む、娘だけはどうかご勘弁を！！」

「お父さん、無理しないで！！　従いますから父に手を出さないで！！」

四人の男が若い娘の手首を掴み攫おうとしており、それを娘の父親が止めようとしていた。男達の一人が鬱陶^{うつとう}しげに手にした剣で父親を斬ろうとしているのに気付いた娘が慌てて男達に対して服従の意思を見せ懇願した。

男達の格好はバロム帝国兵の証である赤鎧ではなく、上半身が半裸になっていたりレザーアーマー等の軽装をしていた。明らかに帝国兵士がする装備ではなかった。

「ちっ、なんだよ、ただの山賊かよ」

騒ぎの元凶がバロム帝国とは無関係だと知った男は逃げ出す準備を止めて、とりあえず槍を手に窓から飛び降りた。

男は着地と同時に槍を振り上げ、娘の手首を掴んでいた山賊の腕を肘から切断する。腕を切断された男が反応を示す前に穂先^{のど}とは反対の先端側である石突きの部分で喉を突いた。

「げえっ！？」

喉を突かれた男は奇声を発しながら倒れた。

娘と父親を背に庇う構えを取りながら刃を他の男達に向けて牽制を行う。

「レオさん!!」
「おはようさん」

娘の呼び掛けに緊張感の欠片もない返事を返す男レオ。ちなみに今はもう昼過ぎである。

唐突に上方から現れたレオに驚愕を隠せないでいた男達は自分達の持つている武器とレオの持つている槍を見比べて苦虫を噛み潰した様な表情を見せた。

男達は全員とも青銅の剣を持っている。

三すくみの関係というものがあり、剣は斧に強く、斧は槍に強く、槍は剣に強い。

男達はそれを知っているの、レオの事を攻めあぐねていた。無論レオもそれを知っている。だからこそ、多人数に対しても戸惑う素振りを見せずにすぐさま動いた。

「まず一人」

宣言と同時に突き出された槍は横に並んだ男達の真ん中に立つ男の胸元へと狂いなく進んだ。男は槍を剣で逸らそうとしたが、予想を上回る力で突かれた槍を逸らすことができずにそのまま男の胸板に突き刺さった。

それを見た左右の男達はレオに向かって横方向から斬りかかった。しかし、その行動を予測していたレオは左からの剣撃を槍の突きによつて絶命している男をそのまま刺さった槍を動かし盾にして防ぎ、その動きで右からの剣撃を後方の槍の柄で弾く。

「なっ!?!」
「くっ!?!」

隙を突いたつもりで放った一撃をなんなく防がれた男達に動揺が

走った。

今度はレオがその隙を突く。絶命した男から槍を勢いよく抜き、そのまま右の男の鳩尾に石突きを埋め込む。

「ガハッ!？」

倒れる男には目もくれずにレオは腰を低く構えて抜いた槍をもう一度、絶命している男の傷口へと渾身の力で突き上げた。すると、槍は易々と男の身体を突き抜けて後ろで佇^{たたず}んでいた男の首に決り込む。

「——!!」

悲鳴を上げることでもできずに開いた傷から赤い泡を吹き出しながら男は命を手放した。

「ものは相談なんだが、俺が村の危機を救ったら宿代とかその他もろもろ全部無料にしてくれないか？」

喉を突かれて気絶している男と鳩尾を突かれて悶絶している男にも容赦なくとどめ刺したレオは槍の刃についた血糊を拭いながら宿屋の親娘に交渉し出した。怯えている様子を見せる親娘に対してあんまりな物言いだが逆にその平坦な話し方に冷静さを取り戻した親娘はレオの提案に承諾の意を示した。

「よし、じゃあ頑張りますか」

そう言って煙が上がる方へと駆けていくレオには気迫と呼べるものは全く感じれなかった。

山賊を討伐することに成功したレオは酒場で行われる祝いの宴を断り一人早めに眠りについた。ちなみにまだ日は沈んではない。

レオ L V 1

種族：ベオク

兵種：傭兵 下級

スキル：必殺+5、勇将

重量：10

HP：17 速さ：8

力：9 幸運：0

魔力：1 守備：7

技：10 魔防：4

体格：9

移動：6

持ち物：鉄の槍、薬草×10、傷薬×5

翌日、村を出る事にしたレオの元に一人の少年が訪ねてきた。

「レオ兄貴！！俺も旅に連れてつてくれ！！」

宿屋を出てきたレオを正面に捉えて十代半ぐらいの少年が元氣一杯にそう頼んでくる。

「……昨日の山賊討伐のときに手伝ってくれたやつだよな、名はたしかセルクだっけ？」

黒いバンダナを頭に着けた金髪の少年が尊敬の眼差しを蒼き瞳に宿らせながら発した言葉にレオは疑問の言葉で返す。

自分の名前を覚えていてくれた事が感激だったらしく蒼瞳を輝かせた。

「名前、覚えていたんだな、昨日のレオ兄貴の勇ましい槍捌きに惚れ込んだんだ。どうか旅に連れてつてくれ」

「そりやどうも、……でもお前、剣を使っていただろ？俺じゃあなんも教えられないぜ？いやぁ残念、じゃあそいう事で」

適当に理由を述べて立ち去ろうと横をすり抜けて村を出ようとし

たレオであつたが、セルクはそれを許さない。

「剣は今まで我流で振つてきたんだ。いまさら誰かに教えてもらおうなんて思つちやいない。俺はレオ兄貴の強さに惚れ込んだんだ！
！頼む！！」

レオの前に回り込んでもう一度、今度は頭を下げて頼んでくるセルクにレオはため息を吐く。

「はあ……お前、親は？」

「いない。父が男手一つで育ててくれたんだけど、一年前の徴兵に出されたんだ。それ以来手紙一つこない……」

事情を悟つたレオは最後に確認をとる。

「旅には金が掛かるんだぞ？」

「大丈夫だ。金はこの身で稼ぐ！！」

傭兵稼業をやってきたセルクにレオは利用価値を見出した。

「ん〜、しょうがない、お前の熱意に負けたぜ」

「！？ ありがとう、レオ兄貴！！」

白々しい口調で話すレオにセルクは気付くことなく、ただ喜びだけを噛み締めていた。

——まあ、剣筋は悪くなかつたしな——

戦場に出して死んで当然、運良く手柄を立てたらその恩賞の一部をもらつ、

思わぬ稼ぎ手の入手に密かにほくそ笑むレオであった。

——うまいければ、これからずっと寝て生活できるな、……フフッ——

レオの行動原理は寝る事にあつた。

セルク L V 1

種族：ベオク
兵種：剣士 下級
スキル：必殺+5
重量：6

HP	：15	速さ	：9
力	：6	幸運	：5
魔力	：2	守備	：4
技	：8	魔防	：1
体格	：6	移動	：6

持ち物：青銅の剣、キルソード、薬草×5

「ん？ レオ兄貴、あそこの馬車がなんか襲われてるみたいだ」

傭兵として働くために戦場の近い南の街へと向かったレオ達は盗賊団に襲われている馬車に遭遇した。

「戦争やってるとイヤでも治安は悪くなっていくもんだからな」

レオは心底ウンザリした様子で呟きながら様子を窺う。

馬車には護衛の騎士団がついているようだったが苦戦を強いられていた。

盗賊団の規模は大きくないことに気付いたレオは何故苦戦しているのかを眼を凝らして見極めた。

「ちょっと待て、あの盗賊団、半獣で構成されてるのか？」

盗賊団の中に大型の猫や狼が混じっているのを見たレオは驚きの声を上げた。それに対してセルクは疑問の表情を浮かべてレオに質問する。

「半獣ってもしかしてラグズのこと？」

「へえ、おまえは半獣の事をラグズっていうんだな」

レオは少し意外そうにセルクを見た。

「……と、こんな話をしている場合じゃないな、見たところ襲われている馬車は結構なお偉いさんが乗っているようだし、ここは一つ恩でも売るときですか」

「うわあ、村を出ての初戦がラグズだとは思わなかったな。やっぱ

りレオ兄貴についてきて正解だ」

セルクは腕が鳴るぜと言いたげに肩に手を当てて腕を回している。

「一応聞いておくけど半獣の化身については知っているよな？」

「普段は俺達ベオクと同じ姿をしているけど、闘いの時には獣の姿に変えてすげえ強さをだすんだろ、もちろん知ってるさ」

「よし、それなら俺達が攻めるべき場所がどこ分かるよな？」

レオの問いに自信満々で答えていたセルクだったがレオのいう攻める場所というのは理解できずに首を傾げた。

セルクの無言の返答にレオもただ無言で盗賊団の後方を指差した。

「ふんっ！、 オゼロン！！ あまり馬車から離れるな」

白髪の混じる黒髪を激しく揺らす歴戦の騎士といった感じの貫禄を出している長身の男が己の愛馬を巧みに操りながら襲い来る獣の攻撃をかわして斧を振り下ろし部下に命令を出した。

オゼロンと呼ばれた赤髪の青年は防戦一方の現状を打破すべく敵陣へと特攻をかけようとしていたのだったが、上司の護衛隊長であるギース隊長に自重を促され慌てて馬車の近くの戻った。

「しかし隊長！　このままじゃいずれ体力が底を尽きます。どうか自分に特攻を命じてください！！　命に懸けても盗賊団の頭領を討ち取って見せます！！」

オゼロンはその赤眼に熱き炎を灯しながらギースに進言した。それを耳にした、隣で戦っている緑髪の青年が翠色の眼を細めて呆れたように呟く。

「そういう台詞は自らを省みてから言ってほしいものだな、君の實力じゃ敵の頭領に辿り着く前に死ぬのが関の山だよ」

「なにを、ディット！！　貴様、俺を愚弄するのか！！」

戦闘中にも拘わらず問答をし出したオゼロンとディットに叱責を飛ばすギース。

「二人とも、状況をわきまえろ！！　オゼロン、伝令を南の街に出してある。　じきに援軍が駆けつけてくる。　今は耐えろ」

上司から叱責を受けて気を引き締めた二人だったが、ディットは少し不可解そうに言った。

「それにしても隊長、半獣達の動きがいやに精練されていることが気になりますね」

本来、ラグズが行う獣化能力である化身は長時間できるものではなく、ベオクがラグズと戦う際には化身状態であるラグズの攻撃に

耐え化身が解けた隙を突いて倒すものである。だが今、ギース達が闘っているラグズ達は化身が解けそうになると後方に下がり、後方に構えていたラグズが化身して前方に出るという絶妙な前後交代によりギース達が闘うラグズは常に化身状態にあるのだ。

「うむ、もしかするとただの盗賊団ではないのかもしれないな」

「だからこそ、俺が突撃して敵後方に控えている化身状態でない半獣を討つべきでは」

ギースは再び同じ事を言い出したオゼロンに少し腹が立ったのか、馬上のギースに跳びかかって来た猫のラグズを必殺の一撃で薙ぎ払いながら怒鳴った。

「馬車の安全が最優先だ！！ 馬車にはあの方が乗っておられるんだぞ！！」

噴火の如き怒号を発すギースの迫力に怒鳴られたオゼロンは勿論、デイトや敵方のラグズ達までがおもわず怯む勢いであった。

「我らの責務は護衛である。護衛対象を危険に曝してまで何かを成す必要はない！！」

ギースの怒号によって微かに動きが鈍くなったラグズ達を相手に一人の熟練騎士と二人の若輩騎士は現状の打開よりも馬車の護衛を続けるのであった。

ギース L V 1

種族：ベオク
兵種：斧騎將 上級
スキル：恐怖
重量：37

HP：32 速さ：16
力：18 幸運：12
魔力：8 守備：20
技：17 魔防：10
体格：14 移動：9
持ち物：銀の斧、鉄の斧、傷薬

オゼロン L V 3

種族：ベオク
兵種：槍騎士 下級
スキル：強運
重量：35

HP：20 速さ：9
力：10 幸運：13
魔力：2 守備：9

技 : 10 魔防 : 4
体格 : 13 移動 : 8

持ち物 : 鉄の槍、手槍、薬草

デット LV3

種族 : ベオク

兵種 : 弓騎士 下級

スキル : 練磨、怒り

重量 : 34

HP : 18 速さ : 11
力 : 9 幸運 : 5
魔力 : 2 守備 : 8
技 : 12 魔防 : 6
体格 : 12 移動 : 8

持ち物 : 鉄の弓、傷薬

「レオ兄貴、オレ やっぱり納得できねえよ」

盗賊団の後方を攻めるために茂みの中を隠れながら近付いていた
レオとセルクだったのだが、セルクはあまり乗り気ではなかった。
セルクは眉をひそめていた。

「やっぱりさあ、正々堂々と名乗りを上げて駆け込んで行った方が
格好良いと思うんだよな」

不満顔のセルクにレオは呆れた表情を見せる。

「アホ、それじゃ奇襲になんねえだろうが」

「……ムウ」

納得しないセルクにレオは面倒臭そうに諭した。

「効果的な奇襲でより多くの戦果を挙げた方が格好良いんだよ、本
物の戦場ってやつはな 名乗りを上げたいなら騎士になれ、騎士
は護るが仕事、傭兵は攻めるが仕事だ」

語りつつ、レオは手にしていた鉄の槍を強く握り締めた。

「ようは勝てばいいんだよ、俺達傭兵はな いくぞ」

レオは茂みから飛び出して化身を解いているラグズ達へと駆けだ
した。

「……さすがはレオ兄貴、それが傭兵の美学ってやつなのかあ」

そう言いながらセルクも茂みから飛び出しレオに続いた。

「やあやあ我こそはクルル村一の剣士セルク！！ 我が剣の錆にな

りたくば、かかってくるかい!!」

「……全然分かってないな、あいつ……」

大声で名乗りを上げるセルクにおもわず溜息を洩らしたくなったレオであったが、敵が目前にまで迫っていたので我慢することにした。

ラグズ達が前後交代をしたばかりのときを狙って行った奇襲おこなだったため、奇襲を受けたラグズ達は目立った抵抗をすることもできずにレオとセルクの前で倒れたゆくのであった。

「!?!? くっ セルク、よける!!」

突然の声にセルクは目を向けることしかできなかった。目を向けた先にあったのは自分の顔面のすぐ下、つまり首を狙って襲い来る鋭い牙だった。

「——っ!?!?」

目を強く瞑り肩を強張らせて死を覚悟するセルク。

だが、想像していた衝撃はくることはなく、しばらくして代わりにきたのは叱責の言葉であった。

「バーカ、いつまで瞑ってたんだ。戦場で目を瞑るなんていい度胸してんな」

そんな言葉と共にセルクの額に軽く小突かれたような衝撃がくる。セルクが驚いて目を開けるとそこには自分に襲い掛かってきた牙の持ち主であろう狼のラグズの死体とその胴体に刺さっている槍を抜いているレオの姿があった。

「……レ、レオ兄貴……」

「礼なら、この槍の持ち主に言いな」

レオが引き抜いていた槍はレオが持っている鉄の槍よりもかなり短く軽量にできており投げられるようになっていた。手槍と呼ばれる武器であつた。

「まあ、とどめは俺が刺したから俺にも恩は感じとけ」

恩を売る事が好きなレオは言った。

「前方で戦っていた半獣どもが来やがったな、セルク 俺から離れるなよ、ここからが本番だ」

右手に鉄の槍、左手に手槍を構えたレオの雰囲気が変わったことにセルクは気付いた。ふとレオの背に目を向けるとそこには少しだけ血が滲んでた。

「レオ兄貴！？ 背中に傷がつー！」

「なあに、傷薬はある。あとで塗つとくさ」

セルクにラグズの牙が迫った時にそちらに集中してしまい、その隙を突いて背中から猫のラグズに襲われたのだ。

そこでセルクはレオから感じる雰囲気の変化を悟った。いつも自然体で緩やかを通り越してだらけた空気を醸し出しているレオが傷を負った事によって本気になったのだ。

勇将 発動

「……俺を本気にさせた代償はでかいぞ？」

だれにも聞こえないように呟いたレオはこちらに迫ってくるラゲズに向かって手槍を投げるのであった。

スキル説明

必殺 + α : α の数値分だけ必殺の一撃を出す確率が上がる

勇将 : 深い傷を負うと発動する時がある。力、技、速さが
1.5 倍となる

恐怖 : 周囲の敵の動きを鈍らす

武器の性能

青銅 < 鉄 < 鋼 < 銀

上質な物ほど使い勝手が良い

第一幕 傭兵とは（後書き）

完全に趣味の世界です。

更新は不定期にもほどがあります。

御注意を

第二幕 不穏な屋敷

「これで終わりだ!!」

猫のラグズからの攻撃をかわしたセルクは絶好の隙を見出し、必殺を繰り出した。

その手で輝きを放つはキルソード、必殺の出すのに長けた細めの武器である。

「その武器、なかなかの切れ味だな」

セルクの見事な一閃を見たレオはこれは掘り出し物を見つけたな、とセルクとキルソードの二重の意味でほくそ笑みながら言った。

相変わらず、レオのそんな思惑には気付かずにセルクはただ嬉しそうに笑った。

「そうなんだ、これ、父さんが俺に残してくれた物なんだけど今まで一度も使ったことがなかったのに、なんかこう手に吸い付くみたいに使い易いんだ」

セルクの言葉に微かに眉をひそめたレオはキルソードを売り飛ばす考えは諦めることにした。

「……チッ」

セルクには聞こえないように舌打ちをしたレオは盗賊団がもういないことを確認する。

「レオ兄貴の猛攻のおかげでラグズ達、一気に逃げていったもんな

「、敵にあんなのがいたら俺でも逃げるよ」

「それはもういい、護衛騎士の連中に挨拶しとくぞ」

自分の行動を思い出して少し顔を赤らめながらさっさと騎士隊の元へと歩き出したレオの後をセルクはついて行った。

レオ L V 4

種族：ベオク

兵種：傭兵 下級

スキル：必殺+5、勇将

重量：10

HP：20 速さ：9

力：11 幸運：0

魔力：1 守備：10

技：13 魔防：7

体格：9 移動：6

持ち物：鉄の槍、薬草×6、傷薬×4

セルク L V 4

種族：ベオク

兵種：剣士 下級

スキル：必殺+5

重量：6

HP：18

速さ：12

力：7

幸運：7

魔力：2

守備：5

技：11

魔防：2

体格：6

移動：6

持ち物：青銅の剣、キルソード、薬草×2

「まずは礼を言うべきであろう、援軍かたじけない」

壮年の護衛隊長である男がレオとセルクに頭を下げた。それに対してレオは感心してセルクは、ニシシと朗笑した。

「こちらこそ、セルクが危なかったところを手槍による御助力、痛み入る」

「それは自分の手槍だ」

レオが手槍を見せると赤髪の青年が前へと出てくる。それを見た緑髪の青年が小さな声で

「……いつの間に投げたんだ」

とつぶやいた。

「騎士殿、長距離から放たれた手槍を一縷いちるの狂いもなく的中させる神業、我が相棒を救うために見せていただき、恐悦至極に存じます」
「たまたまだ、そこまで言うほどの事ではない」

差し出された手槍を受け取りながら、まんざらでもないような顔をしている赤髪の青年。

「紹介遅れました。当方、レオと申します」

自己紹介を始めたレオに合わせて周りの者も紹介をして一行は馬車へと向かった。

馬車はレオが見込んだ通りなかなか豪華な造りをしていた。だが、いたずらに金を掛けた成金趣味のような下品なものではなく、さぞ名のある職人が手懸けたであろう気品さが漂っていた。遠くからではあったがしっかりと値踏みをしていたはずのレオさえ一瞬息を呑むほどだ。セルクなど何故か直立不動になっている。

そんなレオ達を尻目に少しだけ誇らしげにしているギースは御者に話し掛けた。

「御者殿、問題はなかったか？」

ギースの問いに御者は少し不安げな表情をした。

「はい、問題はないはずなのですが、戦闘が始まってからもずっと王女様は無言のままなのです。私ごときの者が王女様の許可なく

その御姿を拝見するわけにもいかず……」

御者の言葉にギースの頭の中に最悪の事態が過ぎった。急ぎ馬車の扉の前に行きひざまずいた。

「フィオリオーナ様、護衛隊長のギースでございます。もしよければ御声を拝聴願いたいのですが？」

「……………」

ギースの低くされど力強い声が静寂の中に響き渡る。

応答はなかった。

ギースは不敬罪を覚悟して、立ち上がり扉の取っ手に手を掛けた。

「御免！」

掛け声と共に開かれた馬車の中では闇が広がっていた。

「……………」

長い沈黙を続けるギースを不思議に思ったレオ達はギースの後ろから、そおーと中を覗き込んだ。そしてギースと同じく言葉を失った。

薄暗い密室の中に金髪の少女がいた。

だが、その身体は力尽きたかのようにだらけており、目は深く閉じられている。美しく整った顔は血の気を失って白く透き通っているように見えて闇の中ではより存在感を放っていた。

死体

そんな言葉がレオの頭に浮かんだ。
が、

「……スウー……スウー」

耳を澄ますと微かに聞こえてくるのは寝息のそれ。よく見るとその証拠に控えめな胸が上下している。

寝ていた。

外では激戦が繰り広がれていたというのに、騎士達がフィオリオーナ様と仰ぐこの少女は一人夢の中であつたのだ。

「……っ……うん？」

開かれた扉から差し込む日光が眠る王女の臉を開く鍵となり、ゆっくりと開かれる。

「……あれ？ ギース、もう街に着いたんですの？」

まだ、寝足りなさそうに眼を擦るながら尋ねるフィオリオーナ。その藍色の瞳ははまだ虚ろいでいる。

「……………」

一同はいまだ沈黙を破れないでいた。そんな中、レオだけは馬車に背を向けて必死に込み上がってくる笑いを堪えていた。背中が細かく震えている。

——隣であんだけ煩く闘っていたっていうのに、まったく気付かずに昼寝？ ハハッ、すげえ！ 俺でもそんなことできねえよ！！

自分よりもよく眠る人物をレオは初めて見た。レオにはそれが堪らなくおかしかった。

「…………ッ、…………ッ…………」

こちらに背を向けて異様なほどに震えているレオに対して不思議そうに視線を向けていたフィオリオーナであったが、ふと彼の背中の服が破れ紅く染まっていることに気付いた。

「怪我をなさってますの？　大変！　わたくしが治して差し上げましょう」

「……………え？」

レオは振り返って疑問の表情を浮かべた。フィオリオーナはそれに返事することなく馬車の中の奥から杖のような物を取り出す。そして杖をレオの背中にかざした。

「ライブ」

短くも心の奥まで沁み渡るような呪文を唱えた。セミロングの金髪が魔力に流れに合わせて僅かに揺れる。

神秘的な光が杖から溢れ出てきてレオの傷へと集まっていた。光に覆われて傷は次第に見えなくなり数秒後、徐々に光が消えていき完全に消えた時、光と共に傷は癒えていた。

常にかけていた背中中の痛みが消えたことに驚いたレオはゆっくりと背中を手を当てて傷が完全に塞がっている事を確認する。セルクは生まれて初めて見た魔法に絶句している。

「これでもう安心ですわ、……………ところで、ここはどこですか？　南の街にはまだ着いていないようですけど」

フィオリオーナは二人の様子を気にすることもなく現状把握を図る。

王女の言葉に護衛騎士隊はこれまでの出来事を順を追って話した。フィオリオーナは一瞬、羞恥からか白い頬を桃色に染めていたがすぐに平常心を取り戻してレオとセルクの前に堂々と立った。男性として平均的な身長のセルクとやや長身のレオの前に立つとフィオリオーナの背丈はより一層低く見え、姿はより一層幼く映った。

「初めまして、アルカディア王国の第三王女フィオリオーナ・オツド・アルカディアと申します。ギース護衛隊長から話はお聞きしました。私達の危機を救っていただきありがとうございます。レオさん、セルクさん、この感謝の気持ちをご^{あいわ}のように表したらよいのでしょうか？」

だが、凜とした佇^{たたず}まいから発せられた流れるように紡がれる言葉の並び、そして傭兵の心理を理解している問い掛け、この二つから感じ取れるフィオリオーナの知性の高さは侮れるものではなかった。レオは目の前の十代半頃の王女に舌を巻きながら、さて褒賞に何を望もうと考えた。自分の予想を遥かに上回る馬車の主にレオは僅かばかり戸惑っていた。レオはあまり国というものに関わりたくないのだ。

だが、

——間近で戦闘が行われても平然と居眠りする王女が、ちょっとしたくらいなら関わるのもおもしろいか——

そう考えを改め、フィオリオーナに言った。

己が望む褒賞を

フィオリオーナ

LV1

種族：ベオク

兵種：王女 下級

スキル：祈り

重量：6

HP：18

速さ：5

力：2

幸運：6

魔力：9

守備：2

技：6

魔防：8

体格：5

移動：6

持ち物：ライブ、傷薬×4

無事に南の街に着いた馬車と護衛騎士隊はアルカディア王国南方
一帯を直轄地とするノルターレ卿の屋敷へと入った。

馬車から出たフィオリオナを待っていたのは若い二十代前半ぐ
らいの男だった。

「これは、これは、我が国の誇りである麗しきフィオリオナ様、
此度は王都からの御足労、真に有り難く存じます」

「南方の直轄、いつもご苦勞様です。……ノルターレ卿の姿が見
えないようですが？」

フィオリオナが慣例の挨拶を早めに終わらして本題に入ろうと
したのだが、肝心のノルターレ卿がいないことに気づき問う。
それに目の前の若者は申し訳なさそうに答えた。

「非常に申し訳ないのですが、父であるノルターレ卿は今、急用を
処理されている最中でして、今晚中にとされますと遅くなってしま
います。僭越ながら本日は長旅の疲れを癒しになって明日、会合な
さるのがよろしいかと存じ上げます」

丁寧な口調で不敬極まりない内容を言っているのだがフィオリオ
ナは気にすることなくノルターレ卿の息子であるルツマウに挨拶
をして部屋へと案内された。その際、伝令兵がここを訪れたはずだ
とギースが聞いたところ、そのような者は来ていないという返事が
返ってきた。

「……………そんなはずはないのだが……………」

ギースは明日、伝令兵の搜索をする事を二人の部下に伝え王女に
は心配を掛けないために話さないように聞かせた。

支援会話C

レオ&セルク

夜、レオとセルクは南の街の宿屋で泊まっていた。

もちろんベットに寝転んで眠る準備万端のレオに窓際の椅子に座っているセルクは話し掛けた。

「レオ兄貴、なんで騎士隊の前るとき、あんなしゃべり方してたんだ？」

「んー、傭兵つてのはなあ、粗野な話し方をする奴がほとんどなんだよ」

目を瞑り、あたかも眠っているかのようにしながら答えた。というより声がすでにねむそうだった。

「相手もそれを知っているから、俺の話し方を聞いて意表を突かれるんだ」

徐々に声が弱くなっていく。

「そうすれば、相手は俺に少しだけ一目置くようになる。話し方一つで一目置かれるんなら安いもんだろお？　だから俺はお偉いさんの前ではできるだけ上品なはない………スウ……」

眠った。

「………すっげーためになる話なのに台無しだよ、レオ兄貴……」

セルクは苦笑した。されど胸中では尊敬するレオの言葉を反芻はんすうさせていた。

レオが眠ってしまい暇となったセルクは窓から夜の街並みを眺めようとして街がやけに静かなことに気付く。夜といってもまだ日が沈んだばかりで自宅へと帰る人ぐらいいはいてもいい時刻であった。

「？　………なんだ、あれ」

夜目の効くセルクは王女達がいる屋敷の方へと急ぎ足で駆けてゆく兵士達を見つける。なにやら不穏な空気を感じ取ったセルクは眠っているレオを起こした。

「なんだよ、人が気持良く寝ているときに」

レオは不機嫌そうな声色を出しながら起き上がった。セルクが感

じ取った不穏な空気を話すとレオは眠たげにしていた眼を細めて険しくした。

「少し気になるな、様子を見てくるか」

レオは長年で培った傭兵の勘を働かせて宿を出ることにした。

「チツ、なんか面倒臭えことになってんなあ」

高い壁を囲いに行っている屋敷の門を物陰から覗いたレオは忌々しそくに呟く。

「どういう事？」

「門番を見ても、屋敷の外よりも中の方を警戒しているのがまるわかりだ」

セルクがこっそり覗くと二人の門番は背を外に向けて中の様子ばかり窺^{うかが}っていた。

「あれは中でのなにか起こってんな」

レオはそう言いながら顔に布きれを巻きつけ、特徴的な橙髪を隠して気の抜けた紅眼だけをのぞかせた。

「ちよっくら行ってくるわ」

門番の元へと走り出したレオは門の近くで燃えたぎる篝火^{かがりび}によりその輪郭をはつきりと現したが屋敷の中に視線を送っている二人の門番はそのことに気付かない。

槍の石突きによる素早い二連突は門番の襟首を正確に突き、二人の門番は小さく呻き声を上げて気絶した。

「完全に門番失格だな」

気絶した門番から閉ざされた門の鍵を抜き取るレオに同じく顔に布きれを巻いたセルクが近づく。

「大丈夫かな？　こんなことして」

「顔は隠してんだ。捕まりさえしなけりやなんとでもなる、気にすんな」

セルクの心配を軽く一蹴するレオ。

そのレオの耳が聞き覚えのある声が微かに捉えた。

「さあて、姫さんのところへ行くとしますか」

「なんですの、あなた達は？」

自国の王女が休まる部屋に不躰な甲冑の音を鳴らしながら入ってきた兵達に怒りの感情を含ませてフィオリオーナは声を上げる。

不敬罪で処罰されてもおかしくない事を行っている兵達はしかしフィオリオーナの声を聞いても怯んだ様子を見せずに淡々と無感情の声を出した。

「アルカディア王国第三王女フィオリオーナ・オッド・アルカディア様、失礼ですがその身を拘束させて頂く。 丁重にお連れしろ」

最低限の敬意を払いながらも、あからさまに蔑んだ思いを瞳に潜ませて隊長らしき男が部下に命じた。

「なっ！？」

驚きの声を上げ、おもわず後ずさったフィオリオーナは窓のすぐそばの壁に背を付けた。

伸ばされてくる手に怯えて両手で持った杖を胸の前に掲げ、祈りをするような形で眼をきつく閉じた。

「そこまでだー!!」

元気な掛け声と共にフィオリーナの隣の窓が破れ、そこから金髪の少年が剣を片手に飛び込んできた。着地に成功したセルクはフィオリーナに手を伸ばしたまま固まっている兵士を一瞬で斬り伏せる。

「王女様！　大じょ……ご、ご無事でいらつしやいまするか？」

口を開いたセルクは話す途中でレオの言葉を思い出して無理矢理、丁寧な口調へと切り替えた。続いて窓から入ってきたレオはため息を吐く。

「なにを言っているんだ？　おまえは」

「な、何者だ！？　貴様らは!!」

突然のちんにゆうしゃ闖入者に動揺を隠せない兵士は声を荒らげた。

兵士の動揺を悟ったレオは普通に答えるふりをして緩やかな動きで

「いやなに、名乗るほどの者でもないです、よっ!!」

兵士の胸を槍でしゅう貫く。

「ガッ!？」

とことん正々堂々とは無縁の男であった。
レオの刺突を目にして戦闘態勢に入る他の兵士達。

「セルク、とりあえず部屋の敵を一掃だ」

「し、承知致しました!!」

「……いつまでやっているんだ」

屋敷の地下で爆音が鳴り響いた。

地下独特の湿気った空気が熱風により吹き飛ぶ。

「く、くそお、俺の魔道書を……」

あちこちに黒焦げを作っている魔道兵が地下へと続く階段から這い出て息絶えた。爆音を聞き付けてやって来た兵士達は恐る恐る階段へと近付いて覗き込む。

「ファイアー」

霊妙な響きを持つ透き通った声が地下の奥から響き渡ってきた。階段の奥に潜んでいた闇が突如消え、代わりに眩しいほどの明かりが現れた。

「う、うわぁあ!？」

運悪く魔法の知識を片鱗でも持った者は心に恐怖を刻み付けて逝くこととなった。それ以外の者は理解することなくただ明かりの正体に疑問を持ったまま消し炭となる。

黒煙が上がる廊下に階段から一人の炎魔道士が上がってきた。

「……………」

廊下にたちこめる黒煙は人の視界を奪い、ひとたび眼に入れば激痛をもたらすはずなのだが炎魔道士は迷う素振りを見せずに淡々と歩き去っていった。

「……………!!……………」

遠くから人が焼ける時特有の脂の焦げた臭いを嗅ぎ取ったレオは顔をしかめた。

「? どうしたんだ? レオ兄貴」

部屋の兵士を全員倒して一息ついていたセルクは顔をしかめているレオに首を傾げた。

「厄介な奴がいるかもしれねえ、ちよつと見てくるからおまえはここで姫さんを守っている」

炎魔道士、または雷魔道士の存在を確信したレオは様子見をしてくることにした。付いて行きたそうな顔をしているセルクに屋敷の兵士は槍兵が多い事を告げて注意を促す。

「幸い、この部屋は廊下の端だから敵兵は一方からしか攻めれない、しっかり姫さんを守りなよ、信頼してんだから」

「！！ わかった、俺にまかせとけ！」

セルクの扱いを心得ているレオは楽にセルクを説得するとフィオリオーナに顔を向けた。

「少し偵察のします。護衛騎士隊のことも気になりますから」

上品な口調をやめて単なる敬語で話したレオにフィオリオーナは頷いた。

「よろしくお願いします」

フィオリオーナの言葉に頭を下げてレオは駆け出した。

廊下を懸けるレオは薄暗い廊下に細心の注意を払いながら臭いの強くなる方角へと進む。

——姫さんの話だとこの屋敷の持ち主は穏健で知られるノルター

レ卿、なぜこんな蛮行に及んだのかは姫さんも分からないと言っていたが……――

レオは自分の傭兵の勘が激しく警鐘を鳴らしているのに気付いていた。しかし、その警鐘を振り払いレオは突き進む。

廊下の突き当たりを前にしたレオは壁を背にして慎重に右の廊下を顔だけを出して覗き込む。

「ファイアー」

目前には灼熱の焰が迫っていた。

「うおっ！？」

慌てて顔を引っ込めたレオのすぐ鼻の先を焰が掠める。前髪が少し焦げた。

「予想通り、てか予想以上の難敵だな」

恐ろしい程に間合いの良かった攻撃にレオは戦慄を覚える。だが、攻撃後の隙を狙わない手はなかった。

レオは壁から飛び出し一気に炎魔道士へと近付く。炎魔道士が射程内に入ると同時に繰り出される刺突。

「――！？」

衝撃を受けたかのように身体を硬直させた炎魔道士を見てレオは勝利を確信する。

しかし、今度はレオが身体を強張らせる番であった。レオはローブ姿に根暗な顔をしている陰険な魔道士を予想していたのだが、目

の前で佇んでいる炎魔道士はあまりに予想と食い違っていた。

豊満なものを胸の前に二つ付けてある魔道士は紅いローブを羽織っており、腰まで伸ばしている黒髪は夜の闇に溶け込みながらもその艶やかな存在感を失っていない。

驚愕を露にする顔は端整な顔立ちをしていたが若干吊り上がった眉が本来の性格を物語っている。

予想外の女魔道士にレオが一瞬の躊躇を見せると女魔道士は身体の硬直を解き、紙一重で槍をかわして後ろへと下がった。

「くっ」

槍をかわされたレオは距離を持たれるとまずいと思い、距離を詰めようとした。が、女魔道士が発した言葉により再び動きを止めることとなった。

「半獣が武器を使うとは思わなかったな」

「な!?!」

女魔道士のまさかの発言に言葉をなくすレオ。

「半獣には半獣なりの誇りがあると思っていたのだがな、フッ」

侮蔑の込められた言葉と共に鼻で笑う女魔道士にレオは戸惑いの表情を浮かべる。そこでレオは女魔道士が終始瞳を閉じたままであることに気付く。

「盲目?」

「左様、されど侮るなかれ、生まれながら光を知らぬ私は代わりに気配を読む力を持っている!」

胸を張りながら自慢げに話す女魔道士は魔法を発動させるための魔力を込め始めた。魔力の奔流に吞まれて長い黒髪が波打つ。

「なんで敵の俺にそんなことわざわざ教えるんだよ」

「あの世で油断したなどと言いつて訳をされたくはないのでな」

レオは槍を構えて必殺の構えをする。

——この女は確実にここで殺す——

二人の間に一触即発の空気が流れる。

兵種説明

傭兵：

槍の扱いに長け、戦場を生業とする闘いのエキスパート。非常に攻防のバランスが巧い。

剣士：

己の剣技に命を懸ける者。素早い動きで敵の攻撃をかわして必殺の一撃を繰り出す。

斧騎将：

熟練の斧騎士が昇進して与えられる称号。馬を手足のように動か

し敵にその機動力を魅せつける。他に剣騎将・槍騎将・弓騎将が存在する。

槍騎士：

乗馬して戦場を駆け抜ける花形。自分の武に信念を掲げる者。他に剣騎士・斧騎士・弓騎士がいる。

王女：

一国の姫君。己の地位を省みず傷ついた者を癒すために杖をかざす。攻撃の術は持たない。

第二幕 不穏な屋敷（後書き）

登場人物の名前は「暁の女神」に出てきた人物以外は全くの無関係です。過去のファイアーエムブレムの作品に出てきた人物と同じ名前でも関係はありませんので、御注意を

第三幕 内乱の序章

「双方、しばし待たれよ!!」

炎魔道士とレオが相打つ廊下に騎馬に乗った熟練騎士が現れた。屋内にもかかわらず騎馬を駆っている事に驚いたレオだったが炎魔道士への警戒は緩めることなく熟練騎士に話しかける。

「ギース殿、待たれよとはどういう意味だ？」

炎魔道士はギースの事を気配で確認すると驚きの声を上げる。

「父上!!」

「……………え？」

炎魔道士の発した言葉におもわず呆けるレオ。駆け付けてきたギースは炎魔道士の姿を見て安堵の息を吐いた。

「ルシエラ、無事であったか。屋敷の者からお前はここに来ていないと聞いて心配したぞ」

「心配を掛けてごめんなさい。伝令として屋敷に来たらルツマウ殿に捕えられたんです。詳しい話はフィオリオーナ様にお会いした時に、…………その前に」

炎魔道士はレオに向かって手をかざした。

「この誇りなき半獣を排除します」

ギースは疑問の表情を浮かべてレオに視線を向ける。レオは内心

ギクリとしながらも表では、やれやれと頭を振ってため息を吐く。

「ギース殿、この魔道士殿に言ってくれ。俺は半獣なんかじゃない。獣耳も翼もないだろ？」

髪を弄^{いじ}つたり、背中を見せたりして身の潔白を示すレオを見たギースはルシエラの言った事を否定する。

「ルシエラよ、彼はフィオリオーナ様が雇いになられた傭兵のレオ殿だ。彼はベオクだ。半獣ではない」

揺るぎない父の言葉にルシエラは当惑した。生まれつき目の見えないルシエラは気配を読む力に秀でていた。その力がレオから発せられる気配を獣のそれと判断させる。しかし、味方だというのなら魔法を使うわけにはいかない。

今はその事について言及するよりも王女の事が気になったルシエラはとりあえずレオに対する警戒心は解かないこととした。

「……護衛騎士隊長ギースの娘、ルシエラだ。魔道兵兼フィオリオーナ様の従者をしております。以後お見知りおきを……」

ルシエラはレオに近付くことなく視線すら合わせずにただ形式上の挨拶をするだけで終わった。

レオは苦笑しながらも挨拶に応える。

「傭兵のレオだ。今はフィオリオーナ様は雇われている。ちなみに、オ、ク、だ」

自分の種族名を強調して言ったレオにルシエラは僅かに顔をしかめた。

「よし、フィオリオーナ様のもとへ行くぞ、すでにオゼロンとディットが駆け付けている。合流後、屋敷を脱出する」

ルシエラ

LV4

種族：ベオク

兵種：炎魔道士 下級

スキル：待ち伏せ

重量：6

HP：21

速さ：9

力：4

幸運：2

魔力：11

守備：3

技：10

魔防：11

体格：6

移動：6

持ち物：ファイアー

「ドイツが屋敷の兵士達がフィオリオーナ様を捕えようとしていると話しているのを聞き付けてな、急いでフィオリオーナ様のもとに駆け付けて事情を聞いたのだ」

ギースはレオ達のもとへと来た理由を話した。

「我ら騎馬隊は馬を駆ってこそ本分、たとえ屋敷内でも戦場では馬は手放さん」

なぜ屋敷内で馬に乗っているかを聞くレオにギースは答える。たしかに敵がうついついている場所で馬を手放せば、その馬は敵の手に落ちるのである。

王女達のいる部屋へと続く廊下に着いたレオ達は多くの兵士が王女達の部屋へと向かっている姿を目撃した。

「まずい、この数ではいくらオゼロン達でも食い止めきれない」

少し焦った様子で話すルシエラにギースは手を伸ばした。

「一気に突破して合流する。ルシエラ、馬に乗れ」

ルシエラは伸ばされた手を掴んで馬に乗った。

「あれ？ 俺は？」

レオは自分を指差した。ギースはレオに軽く頭を下げる。

「レオ殿は走ってください、……………突撃！！」

レオの返事を待たずにギースは廊下を駆ける。

「なんだそれ、ギース殿って見かけによらず親馬鹿なのか？」

レオは愚痴りつつ後に続いた。

最小限の敵だけを蹴散らしながら進んでゆくレオ達の耳に意外な人物の大声が届く。

「おまえら、生きて帰れると思うなよ！！」

荒ぶる声が響く中、レオ達の前方に集まっていた敵が次々と倒れていった。

「ふむ、どうやら奴が怒ったようだな」

「奴？」

一人納得しているギースにレオは問い返そうとしたが、斜め後方から敵が剣を振り下ろすのを感じ、槍で受け止める。剣を弾いて反撃をしようとしたがその前に敵剣士の眉間に必殺の矢が突き刺さった。

レオが前方の敵を見ると全員急所に矢が突き刺さり絶命していた。

「デイト殿がこれを？」

「そうだ」

前方の敵が一掃されたのでレオ達が予想していたよりもあっさりと合流に成功した。

デイトの一発必中の矢の活躍で敵の第一陣は見事撃破した。

「あの世で後悔するがいい！ 私を怒らした事をな！！」

吐き捨てるように話すディットにレオは啞然としている。無表情で無口、たまに口を開いても皮肉しか出さなかったディットが今は饒舌で好戦的な笑みを浮かべていた。ギースは啞然としているレオに苦笑しながら説明する。

「ディットは怪我を負うと激情にかられるのだ。感情に任せて放つ矢は予想とは裏腹に正確無比、これを自分の意志で操ることができれば、我が国が誇る極光騎士団に入団する事も可能だろうに」

部下の不遇に憂い顔をするギースに冷静さを取り戻したディットは、とんでもないと顔を横に振る。

「私はギース隊長の部下になれたことを誇りにおもっております。自分を不遇だと思った事は一度もありません」

「無論、自分でもあります。自分はギース隊長の下で働ける事が夢でありました。今の地位ですら自分には身に余る光栄であります」

ギースとディットの会話に入り込むオゼロン。

昇進のためなら仲間をも平然と裏切る印象を騎士に持っていたレオは三人の会話に強い信頼を感じて騎士に対する印象を少し変えることにした。

もう一方では感動の再会を果たしている二人がいた。

相対するルシエラにフィオリオーナは嬉しそうに微笑む。

「フィオリオーナ様、御無事でなによりです」

しかし、頭を下げたルシエラにフィオリオーナは不満げな感情を顔に出す。

「ルシエラ、ここには身分を気にする人はいませんわ。どうかいつ

ものようにしてください」

フィオリオーナの言葉に頭を上げたルシェラは口の端を僅かに上げる。

「フィオ、元気でした？」

フィオリオーナは最上の笑みで返答を示した。

姉妹のように親しげに話しあう二人を目にしたレオはただ気が強いだけの女じゃないんだな、とルシェラをほんの少しだけ見直した。眼の保養となる美女と美少女の談話からレオは自分の相棒へと視線を変える。

「で、お前はそこでなにやってんの？」

廊下の端で膝を抱えて座り込んで俯いているセルクに呆れ気味な視線を向けた。見るとセルクの前には折れていたり刃こぼれだらけで役目を終えている二本の剣、青銅の剣とキルソードがあった。それを見て事情を察したレオはため息を吐いた。

「お前、武器のことも考えずに戦ったんだろ？」

レオ的を射た言葉にセルクは小さく肯く。

「父さんが残してくれた剣、俺が無茶したせいで折れちゃった……、父さんの形見かもしれないのに……」

啜り泣くセルクに、なんだかんだでこいつもまだ子供だな、と思ったレオはセルクの真正面にしゃがんで見事に折れているキルソードを手に取る。

「お前の親父さんは大した人だな」

セルクの父さんに会った事がないはずのレオがそんな事を言っただけでセルクは驚いて顔を上げる。

「売ればお前の食事を助け、使えばお前の身体を護り、折れれば闘いの大切な事をお前に教える、すべてお前のことが考えられている最高の贈り物だな」

言いながらキルソードの刃を根元から折るレオ。刃は簡単に折れる。本当にギリギリまで耐えていた事を物語った。そして柄だけとなったキルソードをセルクに渡す。

「んで、これからは存在するだけでお前の心の支えになる。 だろ？」

渡された柄をしばらく見つめていたセルクは、目に溜まっていた涙を乱暴に拭って立ち上がる。

「そうだよな、……父さん、見ていてくれ、折れることで教えてくれた事、俺 忘れないから」

そう言って柄を懐へとしまい込み、レオに快活の良い笑顔を見せた。

「レオ兄貴、ありがとう」

「なに、事実を言っただけさ」

照れたのか、そそくさと歩き去るレオをセルクは追った。その背

中に送る視線を尊敬から敬愛へと変えて

セルク L V 7

種族：ベオク

兵種：剣士 下級

スキル：必殺+5

重量：6

支援：レオ C

HP：21 速さ：15

力：9 幸運：9

魔力：2 守備：7

技：14 魔防：3

体格：6 移動：6

持ち物：

ルシエラからもたらされた情報はフィオリオーナ達に衝撃を走らせた。

穏健で知られるノルターレ卿は病に伏せており今は息子のルツマウが南方を取り仕切っているというのだ。それだけならまだ納得することもできたのだが問題はそのルツマウが第三王女フィオリオーナを捕えようとした理由が第二王子ゼロスが命じたからというものであったからだ。

「最近、どうも動きが怪しいと思っていたが、まさかこのような暴挙に出るとは……」

ギースは顔を険しくして呟く。

この一件が王族の内輪揉めによるものだと思っただけなのにレオは苦々しい顔をした。あきらかに非は第二王子にあるのだったが今の国情がこちらを後押ししていた。

「今がもし平和の中なら民も我らに味方をしていただしようが、今はバロム帝国と戦時中。優しさや人望は持っていても力をお持ちにならないフィオリオーナ様、力と多くの將軍を召抱えるが野心家であるゼロス様、勝者がバロム帝国と闘う事となるのだから民はおそらくゼロス様を支持するでしょう」

眉をひそめて悲しげな表情をするルシエラ。セルクは隣で話を聞いていたレオに小声で耳打ちした。

「あれ？ でも他の王子や王女はどうしてるんだ？」

つい最近まで田舎村で住んでいたセルクは国の事情などは知らない

いと気付いたレオはそつとセルクに耳打ち返した。

「第一王女はバロム帝国で妃、第二王女は幼少の頃に病死、第一王子は1年前のコルドネルリ戦線での大戦で死亡。それにより第一王子と交流の深かった北の戦闘部族の首長であるラドラックが宣戦布告、おかげで第二王子が王国の態勢を整える余裕ができたんだが、王位継承権は正室の娘である姫さんにあるのが納得できなかったんだらうな」

内輪揉めの原因を悟ったレオは面倒臭いといった思いを隠すことなく顔に出してため息をついた。

「で、どうすんだ？ 敵さんの目的は分かったわけだし、脱出するか？」

もはや初対面時の丁寧さの影もないレオの言動であつたが、盗賊団を追い返した報酬として雇ってもらつたと決まつた時に本来の話し方へと戻していたのでルシエラ以外は誰も気にしない。

ルシエラはレオの言動を咎めようとしたが寸前でギースに止められる。

「ところで、廊下を走っている時に思つたんだが廊下の所々に飾られていた見るからに高そうな壺や絵画はノルターレ卿の趣味か？」

レオはすぐ横で行われている悶着に気付かないふりをして話を続ける。

突然の無意味ともとれる問いにフィオリオーナは首を傾げるが律儀に答えた。

「いえ、ルツマウ殿の趣味だとこの部屋に案内される時にお聞きし

ましたわ」

それを聞いたレオは口の端を吊り上げて底意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「だったら俺にいい考えがある」

「レオさんの良い考えとはどのようなものでしょう?。」

レオの指示で屋敷の庭園で潜んでいたフィオリオーナは興味津々といった空気を出しながら
ギースに尋ねた。

「ふむ、私には見当も付きませぬが怪しいと言ってレオ殿についていったルシェラのことにも気になりますな」

ギースは顎に少しだけ蓄えている髭を撫ぜながら答える。

「レオ兄貴のことだから、きつとすげえことをするに違いないから楽しみにしていなよ、おっさん」

場の空気が絶対零度の極寒となった。周りの者は王女も含めて固まった。

「……………おっさん？」

ギースの低い呟きが凍てついた空気を裂く。

と、ここで幸いにも屋敷の方からほのかな灯りと共に黒煙が漂いだした。すると、王女達を外に逃がすまいと門の前で待ち伏せていた大勢の兵達が慌てて屋敷へと向かっていった。

「た、隊長！ 門の警備が手薄になりました。 今が好機です」

声を震わしながらも決死の覚悟でギースに話し掛けたオゼロンの背中をディットが、よくやったという思いを込めてポンツと叩く。

ギースはふうーと息を吐いて凍て付いていた場の空気を溶かした。

「わかっておる、この騒ぎはレオ殿の作戦だな、フィオリオーナ様はオゼロンの騎馬にお乗りください。ディットは援護に専念、……セルク殿は私の馬に乗れ」

最後の言葉は誰が聞いても低くなっていた。が、やはり気にしないセルク。

「よし、かつ飛ばしていこう！」

ギースが乗馬した馬に元気良く飛び乗ったセルクに同情の視線を捧げる三人であったが、最初に問題発言をしたのはセルクなので自

業自得だと思つて何も言わなかった。

突然現れた騎馬に動揺した門前の兵士達を蹴散らしてギース達は屋敷の脱出に成功した。

「ちょー、はやっ、す、ぎっ！！？……………」

馬に乗り慣れていないセルクは全力で走っている騎馬に振り落とされそうになるがギースはセルクを片手で掴んで支えた。しかし、激しく腰を馬の胴体に何度もぶつける様は尋常じゃなく痛そうであった。おまけにそれを伝えようとして口を開き、舌を噛んで悶絶している。

やはりギースはかなり怒っていた。

「それにしても二人を置いてきてもよかったのでしょうか？」

フィオリオーナは心配げな視線を後方にたたずむ赤く燃える屋敷へと向けた。

「レオ殿は門が手薄になったらすぐに脱出しろと言っていました。心配はいりませんよ、傭兵というのは生き残ることを信条にする者達ですから」

王女の心配を吹き飛ばすように強気で話すオゼロンにフィオリオーナは不安げな表情を消した。

「そうですわね、ルシエラもついていきますし大丈夫ですよね」

「やつらの誤算は屋敷に火を放つなんて野蛮な真似をする者が姫さんの御供にいる事を知らなかったことだな」

レオは自分の策がうまくいって満足げな表情を浮かべながら炎に翻弄される兵士達を眺めていた。その隣でルシエラは閉じた瞳でレオを睨んでいた。

「私の焰を利用しておいでよく言う」

今、屋敷で燃え盛っている火はルシエラが起こしたものであった。

「ルツマウは姫さんを捕える時に万が一自分に火の粉が飛んでこないように屋敷を離れたらしいが、なら代わりに屋敷にその火の粉を被ってもらおうなんて俺も粋な事を考えるねえ。おまけに主人の指示がないから兵士達は主人の自慢の所持品を守らないといけなから姫さんに構っている暇はねえ」

ルシエラを無視して独り言を続けるレオにルシエラの怒りは頂点に達しかけた。

「ほんじゃま、行きますか」

それを悟ったレオは潜んでいた物陰から門へと駆けだした。ルシエラは急いで後続く。

レオ達に気付いた門前の兵士達は武器を構えた。

「それ、一千万の絵画！！ お次は八百万の壺！！」

レオは出まかせの値段を叫びながら手に持っていた物を次々に上空へと投げた。兵士達は慌ててそれを取りに行く。

「いやあゝ、指示をする人間のいない兵士を相手にするのは楽だなあ」

レオ達も屋敷の脱出に成功するのだった。

レオ L V 6

種族：ベオク

兵種：傭兵 下級

スキル：必殺+5、勇将

重量：10

支援：セルク C

HP	: 22	速さ	: 10
力	: 13	幸運	: 0
魔力	: 1	守備	: 12
技	: 15	魔防	: 8
体格	: 9	移動	: 6

持ち物：鉄の槍、傷薬×2、赤の宝玉、竜の盾

兵種説明

炎魔道士：

炎の魔道書を用いて灼熱を操る者。魔の理ことわりを理解して相手の魔法に耐えうる守護に秀でる。獣のラグズに強い。他に竜に強い雷魔道士、飛行系に強い風魔道士が存在する。

スキル説明

待ち伏せ：

敵の攻撃の意思を感じ取り、先制攻撃を仕掛ける事が可能。

怒り：

手傷を負わされると激情と共に集中力を高めて必殺の矢を連続で撃ちだす。

第三幕

内乱の序章（後書き）

第四幕 行商隊

無事、王女達と合流を果たしたレオ達は屋敷の兵士達からの追撃を逃れるために南の街を出てそこから西にある死の砂漠に最も近い街スオームへと向かう事となった。

「……………空気が重い……………」

セルクはボソツと呟く。

山道を進む一同であったが、異母とはいえ兄であるゼロスに狙われるようになったフィオリオーナは屋敷内ではまず脱出することが第一なので深く考えないようにしていたが道中ずっと黙って考え込んでいた。

家臣達はそんなフィオリオーナを気遣って同じく黙している。ルシエラは前方を歩いているレオに常に険しい表情を向けてまっていた。この鬱々とした空気にセルクは辟易していた。唯一頼みの綱であるレオもただ黙って歩くだけである。

なんとかせねば、と変な使命感を心に生じさせたセルクは無理矢理レオに話題を振る。

「レオ兄貴、知ってるか？ 南の街に着いたばかりの時に聞いたんだけど飲食店でやってた大食い大会でとんでもなく大食いなやつがいたらしいぜ」

「……………」

セルクのわざとらしく明るくした問い掛けにレオは無言で答えた。しかしセルクは話を続けた。

「たしかに！ たしかにレオ兄貴の反応も当然だ。で？、…………そ

れで終わる話だ。だがしかし!!」

自分で言っていて調子が乗ってきたのか、声を高らかにするセルク。

「その大食いが女だつて聞いたらどうだ？ 話によると見た目は痩せ形でふらふらした女なんだが、いざ食事が始まるとただ黙々と食べ続けてその手を一時も止めることなく優勝が決まってもなお食べ続けてたらしいぜ」

どうだ、とばかりにレオの反応をわくわくとした気持ちで覗いたセルクは

「……………」

眉ひとつ動かさないレオにがくつと肩を落として落胆した。と、そこで

「……セルク……」

やっとのレオの反応にセルクは肩を上げて眼を輝かせた。

「ちょっと静かにしてろ」

再び肩を落とした。

「ギース殿、ここで休息を取らないか？ 日も暮れてきたことだし」

レオの考えに賛同したギースはオゼロンとディットに辺りに休息

に適した場所がないかを探させた。

「ギース隊長、少し先で休息を取っている少数の行商隊を発見しました」

探索から戻ってきたオゼロンの報告を聞いたギースにレオは行商隊に会おうと提案した。理由はセルクの新しい武器の購入とかなり傷んできている自分の武器の買い替えをしたいからであった。

「うむ、うまくいけば天幕なども手に入るかもしれぬな」

ディットが戻ってくるのを待って一行は行商隊と会う事とした。

「武器がお望みなら俺の馬車に来るといい」

そう言って自分の馬車へと案内するムストンと名乗った顎に豪快な髭を生やしている大柄の男性の後をレオとセルクはついて行き、馬車の中に入って並んでいる色々な武器を眺めた。

セルクは新たな自分の相棒選びに目を輝かせている。レオは先程、名をジョージという金髪の男に売った鉄の槍の代金と手持ちの金を確認して頭の中で目の前の値札に書かれている額について計算している。

セルクが立ち並ぶ数々の武器から馬車の奥に目を向けるとそこにはかなり大きめの両手剣があつた。

「うわー、でっかい剣だな、誰が使った？　こんな剣」

セルクの呟きを聞いたムストンは誇らしげな表情を浮かべながら口を開いた。

「その剣はアロンドイト、俺が知っている中で最も勇敢な男の巨剣だ」

「へえー、と興味深そうにアロンドイトを眺めるセルクにレオは一本の軽めな剣を渡す。

「お前の速さを生かす剣はこうゆう軽量の剣だ」

「おう、なかなか鑑定眼を持っているようだな、それはグラーシーザといって確かに剣士向けな剣だな」

感心した様子のムストンにセルクは首を傾げた。

「あれ、俺　剣士だつて言つたっけ？」

「武器屋を長くやっていれば立ち振る舞いなんかで大体分かるようになるんだ」

「セルクはこれで決定な、俺は鋼の槍と手槍にするわ」

レオの強制的な決定に少々不満顔をするセルクだったがグラーシ

ーザを軽く振ってその扱い易さを感じて笑顔に変えた。

さっそく外で振り回そうと馬車から出たセルクの目の前に浮ついた思いを吹き飛ばすものがあった。

「うわっ、誰か倒れてる！！」

駆け付けたセルクは薄紫の髪を長く伸ばしている若い女性が今にも餓死してしまいそうな様子である事に焦り出す。

「だ、大丈夫か？ レオ兄貴を呼ばなくちゃ」

「……………ま、待ってください……………」

その場から離れようとしたセルクの足首を女性は掴んで引き止めた。意外なほどに力の込もっている手にセルクは戸惑いの感情を深めた。

「……………大丈夫です。 ちよっとお腹が空いてただけですから……………」

今にも掻き消えてしまいそうな細かい声で話す女性にレオが何か声をかけようとした、その時後方から

「イレース、あんた また倒れてたのかい？ 昨日あんなに食べてたじゃない」

呆れたような声色を発しながら妙齡の女性が二人の元に歩いてきた。

「……………ララベルさん」

倒れていた女性——イレースにララベルと呼ばれた女性の方へと

セルクが振り返った。すると

「あら？ たしかセルク君だった？ イレースの心配をしてくれていたの？ ありがとうね、だけど大丈夫よ。この子 いつもこんな感じだからね」

ララベルはセルクを安心させるように言うとイレースに肩を貸して立たせると共に歩き去っていった。

「いったい何だったんだ？」

啞然としていたセルクの後ろから武器の勘定を済ませたレオが声を掛けてきた。

「この行商隊は当たりだな、武器の保存状態も良好だし値段もお手頃価格だ♪」

珍しくかなり上機嫌の様子のレオは啞然としているセルクに武器が傷まない程度に振り回して手に馴染ませておくように言った。

セルクは考えるのを止めてただグラーシーザを振る事に集中した。しばらく武器を振った二人は次は道具屋に行く。訪れた道具屋の馬車でセルクを待っていたものは

「あつ！！」

馬車の奥で黙々と空き皿の数を増やしているイレースであった。隣にはララベルの姿も見られた。

「いらつしゃい、ムストンの武器屋はどうだった？ あの人 頭が固いからあまり値切れなかったでしょ？ あたしはレオさんのよう

な格好良い男性にはどんどんまけるわよ。セルク君にはイレースの相手をしてもらったことだし遠慮なんかしないで言ってきたね」

片目を閉じて好意を表すララベルにセルクは苦笑いを浮かべ、レオはまけるという言葉に一瞬だけ眼を輝かせる。

さっそく薬草や傷薬などを品定めし出すレオを尻目にセルクは自分の村ではあまり見かけなかった書物の類に興味を示した。

その中でも特に興味を引いた単語が載っている書物を手に取り、レオが品を選び勘定を済ませるまでその書物を読み耽っていた。レオは先に外に出ているとセルクに伝えて馬車を出た。

「セルク君って勉強家なのね、お姉さん 感心しちゃうわ」

柔和な微笑みを向けてくるララベルにセルクは頭に手を当てて照れながらも肯定する。セルクに謙遜の二文字は存在しなかった。しかし、それが逆にララベルの心証を良くした。

「よし！ そんなセルク君にその書物をあげちゃうわ」
「えっ、ありがとう！！」

ならば、と馬車から出てどっかで座って読もうと思ったセルクの耳にレオの少し緊張感の含まれた声を捉えた。

「セルク、出て来い」

レオの呼び掛けを聞いて馬車から出たセルクは臨戦態勢に入っているレオや騎士隊を眼にして驚く。

「ルシエラが敵の気配を察知して確認にディットを向かわせた。ルシエラの索敵能力は一流なのはお前も屋敷で見ただろ？ まず間違

いなく敵がいる。 お前も戦う準備をしておけ」

新しい戦いの相棒の具合を点検しながら現状をセルクに説明する
レオに意外そうな声を掛ける者が現れた。

「……意外に私の能力を買ってくれているのだな？」

ルシエラである。

レオは肩を竦めて答える。

「屋敷でお前と合流した後の敵との遭遇率の低さを考えたら当然の
判断だな。俺は人を過大評価しても過小評価はしない主義なんでね」
「なるほど、なるほど」

レオの言葉にルシエラはただ軽く鼻を鳴らすだけだったが隣でそ
れを聞いていたセルクはまた新しい傭兵の心得を聞いた気がして胸
中で反芻させる。

見事に対照的な二人にレオの口の端がわずかに綻ぶ。

「だったらレオ兄貴は俺の事をどれくらい評価してくれてんだ？」

頭に浮かんだ疑問を即座に口に出したセルクにレオは面倒臭い質
問をしやがってと言いたげな顔をした。

「ああ、そうだな、お前は俺の——」

「レオ殿、敵の正体が分かりましたぞ」

レオの言葉をオゼロンの声が遮った。セルクは振り返ってオゼロ
ンを睨もつとしたがオゼロンの隣にいるギースと目が合ってしまった
慌てて首を元に戻した。

乗馬の一件でセルクはギースがすっかり苦手となっていた。

「さっ、雑談はここまでだ。行くぞ」

セルクの動きを訝しりながらもレオはディットの報告を聞くことにした。

敵の正体は中隊規模のバロム兵であった。ここからさらに南にあるコルドネルリ草原が主なバロム帝国との戦場になっており、まだ草原は突破されてはいないはずであった。

つまり、今 山中を行軍しているバロム兵は隠密行動をしているという事となる。向かっている方向はレオ達と同じく西の街スオームがある方向である。万が一 敵の目的地がスオームであったならばロム兵がスオームの街に入って良い事が起こる可能性など皆無である。

ルシエラは敵の気配はその中隊以外には感じられないと断言した。ならばここで迎え撃とうと提案したのは他ならぬフィオリオーナだった。当然家臣達は反対の声を上げた。危険だと、しかしスオームにはアルカディア兵は駐屯してはいなかった。背後には広大な死の砂漠しか存在しないスオームは戦略的価値はなかったからである。対山賊などのために結成された自衛団では中隊とはいえ屈強で常勝のバロム兵を相手に渡り合えるはずもない。

そう判断したからこそフィオリオーナは危険を承知で交戦を唱えているのだ。だが決して命令はしなかった。これは自分の我儘だと自覚していたからである。

最初に折れたのはルシエラであった。

敵中隊の気配から察してそれほど練度は高くないと判断したからである。

次にフィオリオーナの民に対する思いを感じたギースが、隊長が折れるならと残る二人も交戦を覚悟した。

レオとセルクは雇われの身なので最初からフィオリオーナの意見

に賛成していた。

フィオリオーナは申し訳なさそうに眉をひそめていた。

「皆さん、わたくしの我儘に付き合わせて申し訳ありません」

「ここは謝るよりもお礼を言うべきじゃないか？」

一国の王女の謝罪を全く物怖じなく訂正を要請してきたレオにさすがの家臣達も思わず注意しようとしたがフィオリオーナは特に気分を害した様子を見せずに

「そうですね、皆さん、わたくしの我儘に付き合って頂き感謝します」

申し訳なさそうな表情から笑顔へと変えたフィオリオーナを見て家臣達は出かかっていた諫言の言葉を引っ込めた。

ここで意外な助っ人が現れた。

「……………あの……………わたしもお手伝いします……………」

控え目にされどしつかりとした意志が込められた声を聞いた一同は声を発した薄紫の髪を持った女性へと視線を向けた。

「イレースさん」

そう呟いたのはディットであつた。

「……………わたしは魔道の心得があります。……………足手まといにはなりません……………」

ギースが視線をイレースから自分の娘へと変えたとルシエラは黙

したまま肯いてイレースの言葉が真実であることを伝える。

「しかし、イレース殿 どうして我々に協力してくれるのだ？ そちらに有益などないと思われるが？」

ギースの問い掛けにイレースはちらつとディットに視線を向ける。

「……ディットさんが作ってくれた料理は……とてもおいしかったです……」

そこでセルクは道具屋の馬車でイレースが食べていた料理はディットが作った物だったことを悟った。

「……緑の騎士さんはみんな料理が上手……覚えとかないと……」

この呟きはただの独り言のようで耳の良いルシエラ以外には聞こえなかった。ルシエラにしても首を傾げるだけで追及はしなかった。ギースは怪訝な表情をする。

「たったそれだけの理由で協力してくれるというのか？」

無言のままただ頷くイレースにフィオリオーナは謝辞を述べながらも他の行商隊の方の意見を聞かなくていいのかを尋ねた。すると遠くでレオ達の話聞いていたムストーン達が近付いてきた。

「それについても大丈夫だ。俺達も協力させてもらうからな」

ムストーン、ララベル、ジョージといった行商隊の現在いる構成員が全員揃って自分らの考えを話した。

ムストーン達も目的地はスオームだったのでこのままバロム兵がス

オームに入られるのは不都合という話であつた。スオームには仲間が二人駐在しているのだ。
互いの利害が一致していることを知ったレオ達一行は遠慮なく協力してもらうことにした。

イレース L V 3

種族：ベオク

兵種：雷の賢者 上級

スキル：影

重量：6

HP：29 速さ：17

力：14 幸運：11

魔力：19 守備：9

技：19 魔防：16

体格：6 移動：6

持ち物：サンダー、エルサンダー、傷薬×5

兵種説明

雷の賢者：

他に風、炎の賢者も存在するが全員がすべての理魔法を操ることができる。だが一番得意とするのは称号に付いた理である。理の頂点に立つ者に贈られる称号。

第五幕 小川での開戦（前書き）

更新、遅れてすみません。
ちよつと自己嫌悪に陥ってました。

第五幕 小川での開戦

魔道兵と歩兵と騎兵で構成されたバロム中隊が狭い山道を進行していた。

両脇を鬱葱^{うっそう}とした木々に囲まれて息苦しい印象を受ける山道。アルカディア王国軍の前線をすり抜けて隠密行動をしているバロム中隊にとってはただでさえ圧し掛かってくる重圧をより高める効果があるように思えた。

だからであろう、山道を抜けて開けた場所に出た時に兵の中に安堵の溜息が零れたのは――

バロム中隊の前を横切るように流れる小川の水は澄み渡っており時刻が日没でなければ日に当たる小川は人の心を和ませる神秘の光を放っていたことが容易に想像できた。

が、小川の向こう側で見える光景を目にしてバロム中隊に緊張が走る。

小川の向こうには白と黒の二色を併せ持つ鎧を纏った壮年の騎士が乗馬し、小数の兵を率いて進行していた。

バロム中隊の隊長であるトルワは潜入の情報が漏れて迎撃されたかと一瞬焦ったもののすぐに考え直した。情報が漏れていたにしては相対している敵兵の数が少なすぎた。

白と黒の騎士が胸甲にはアルカディア王国の国章である大盾を構える白竜が描かれている。

おそらくは前線への派遣途中の小隊だろうと判断したトルワは部下達に臨戦態勢を取るように命じた。存在を知られるわけにはいかないバロム中隊は目の前のアルカディア小隊を殲滅させないといけないのだ。幸い、後方の山道を挟む森を除けば視界を遮断するものはなにもないため魔法も使用する事が可能、小川が存在するのも好条件だった。

するとアルカディア小隊の先頭に立つ白黒の騎士が部隊の前に出

て声を発した。

「其方はバロム帝国隊と御見受けする。我らはアルカディア王国軍である、この先にある街スオームに敵国である其方を通すわけにはいかぬ。撤退を要求する。要求に従わない場合は排除させてもらおう」
「なっ!?!」

白黒の騎士の言葉にトルワは顔に驚きの表情を浮かべ、そして怒りで赤く染めた。
明らかな劣勢に逃亡はせど、まさか要求などと思われるとは思わなかったのだ。

「この劣勢を前に大口な事を! そのような要求など呑むか!!
わが雷撃の前に朽ちるがいい!! 騎兵、川を迅速に渡り攻撃開始
魔道兵は小川の手前で魔法発射、歩兵は同じく小川の手前でしばらく待機」

怒りに駆られて大声を張り上げながらも、あくまで冷静に命令を下すトルワは将としての器は持っていた。雷魔道士であるトルワは小川の手前で待機し、騎兵隊が小川を飛び越えるために助走をつけ始めた。

小川は横幅は広いものの底が見えてしまっているほどに浅かった。歩兵であってもなんの妨げもなく渡れてしまう。

小川を迅速に渡るようにトルワが指示したのはわけがあった。

「ふむ、レオ殿の言った通り敵は小川を警戒しておるか、ならばレオ殿の作戦も通用するかもしれぬな」

白と黒の騎士——ギースはバロム中隊の騎兵が小川に細心の注意を払いながら渡るのを目にして独り言のように呟いた。

「作戦を確認する。フィオリオーナ様は後方で支援をお願いします。デイトとルシエラはフィオリオーナ様を護るように同じく後方で援護、イレース殿は作戦通りに後方で待機、セルク殿は敵を後方に近づけさせないように、オゼロンと私は前衛で敵を迎え撃つぞ」

各自に指示を出すと銀の斧を構えながら最後に付け足した。

「敵の魔法には細心の注意を払い川には決して触れるな」

覇気の溢れる言葉とは裏腹にギースは内心冷や汗を掻いていた。ギース率いる小隊の中にはフィオリオーナの姿があるからである。当初、戦闘に参加するというフィオリオーナに猛反対をしていたギース達であったが、フィオリオーナの

「わたくしの我儘であなたが危険な目に合うのです。私だけが安全な場所にいるなんてできませんわ。行商隊の方から遠距離からでも使える杖リブローをお借りしましたので後方から援護できますわ」

との言葉に黙ってしまった。

はつきりと言ってしまえば護るべき王女であるフィオリオーナに戦場で立たれると気が散ってしまうような気がないギース達のだが、そんな本音をフィオリオーナにぶつけるわけにもいかずに結局戦場に立

つことを許してしまっていた。

「作戦決行までは無理に攻めようとはせず、防御に徹するように！」

騎兵と魔道兵で攻めるバロム中隊と数少なく兵種にもまとまりのないアルカディア小隊の戦鬪が小川で開戦した。

「くつ、騎兵隊、少数を相手に何を手こずっておる！ 魔道隊、貴様らもよく狙って撃たないか！ 一度も直撃していないではないか」

トルワは焦れる思いを言葉にして部下にぶつける。

小川での戦いが開戦してから未だに大きな変化もなく闘いは続いていた。

アルカディア小隊は少数ながらも精練された動きで巧みに騎兵隊の攻撃をかわし、魔道隊の魔法は騎馬の機動力に翻弄されている。しかし、さすがに避け切れずに直撃と思われる魔法を放てば、その場合のみアルカディア小隊の炎魔道兵ルシェラが魔法を発動させて相殺させていた。

アルカディア小隊後方の、ルシェラは魔法相殺に、弓騎兵ディッ

トはバロム騎兵の牽制にのみ攻撃を行い、アルカディア小隊は完全に防御に徹していた。不自然なほどに。

しかし、トルワは敵は少数だからそうするしかないのだろう、と思いい気にも止めずに現状の打開策を練る。

「敵後方にいるのは遠距離治癒魔法リザーブを使う神官と炎魔法を使う魔道士、それに弓騎兵か、神官と弓騎兵はともかく炎魔法を使う魔道士が賢者の可能性は高いか？」

自問自答をするトルワは賭けに出るべきか迷っていた。

「賢者ならば小川を渡る際に雷魔法を放たれるがこのような小隊に賢者ほどの魔法の使い手が存在しうるか？ それにもし雷魔法を使えるならば開戦時に騎兵隊が小川を渡る際に使われているのではないか？」

戦闘開始時に騎兵に小川の迅速な渡りを命じたのは敵魔道士の雷魔法を警戒したからであった。雷魔法だけならば避ける事も可能であるが電気をよく通す小川の水に向けて放たれると小川の水に触れている者はまとめて雷撃を喰らってしまうのだ。

アルカディア小隊の後方に視線を向けて思索するトルワの眼にはトルワが神官と判断した王女フィオリオーナの隣でひっそりと佇むイレースの姿が映ってはいなかった。

特になんの働きもしないイレースを騎士の従者かなにかだろうとトルワが判断すると忽ちイレースは存在感を失っていった。ただでさえ少数であるのに戦力の温存などしようはずもないというトルワの考えがそれに拍車も掛けていた。

トルワは思い切って指示を出す。

「歩兵隊、一人ずつ順番に小川を渡れ、ただし、前の兵士が完全

に川を渡り切るまで小川には触れるな」

指示通りに小川を渡り、次々とアルカディア小隊との戦闘に参戦していく歩兵を目にしてトルワの口端が吊り上がる。

「無事に渡り切ったか…… やはり、賢者ではなかったようだな」

歩兵隊がすべて渡り終え騎兵隊と合流を果たし一気に攻め上げる様子に満足していた。予想外の敵に苦戦したがそれも終わりだ、そうトルワが確信して最後の締めには魔道隊と共に小川を渡ろうと命令を下そうをした時、異変は起こった。

男は息を殺して隠れていた。

肌寒い風に撫ぜられて葉音を奏でる茂みに紛れて男の橙色の髪が揺れる。本来なら決して混ざらない草の緑色と橙色だが、今は夕焼けの赤に平等に照らされて違和感は消えていた。

男の視線の先には男に背を向けて小川を挟んで行われている戦闘に魔法を放って自軍を援護している魔道隊が存在していた。その中

には指示を出している隊長らしき人物もいる。

おそらくは今、男が魔道隊の元に走り込んでも先制攻撃はできるであろう。しかし、魔道隊の近くで待機している歩兵隊が本人達の自覚なき護衛をしていた。

魔道隊の排除が男の仕事である。だが歩兵隊が近くにいてはそれも難しい。

小川の向こうでの戦闘では男の考えた作戦を命綱としている者達が戦っていた。だが男は焦ることなく待つ。

時が来るのをただ待つ。

そして――

「無事に渡り切ったか…… やはり、賢者ではなかったようだな」

時が来た。

茂みから跳び出て一息の間に魔道隊へと近づく。

隊に命令を出していた隊長らしき人物トルワを真っ先に狙う。トルワが殺気を感じて背筋を凍らせる。

背後を振り返ったトルワの眼に飛び込んだのは自分の胸元に向かって突き出される鋼の槍の姿であった。

「敵隊長打ち取り」

トルワを貫いた男は突如現れた男に面食らっている魔道兵の一人に手槍を投げつけ喉を斬り裂く。

「き、貴様 アルカディア兵か!!」

バロム中隊の副隊長が大きく後退して男の槍の届く範囲を脱しながら魔法の発動を図る。ちょうど対岸の戦闘に撃ちだそうとしていたばかりで魔力の充填はできている。後は呪文を唱えるだけであっ

た。

「ファイ——」

男は届かないと分かりつつも隊長から引き抜いた鋼の槍を副隊長に向かって振る。

当然の空振り。

だが、赤く染まっていた槍に滴る隊長の血が遠心力により飛び散り副隊長の呪文を唱えようと開いていた口に入り込む。

「——っ!？」

突然の口の中に広がる鉄の味に詠唱を中断した副隊長に男は距離を詰めて襲い掛かる。男の攻撃を避け切れずに腕に深手を負った副隊長に男は追撃をかける。だが

「ファイアー」

「サンダー」

他の魔道兵からの魔法に追撃の手を断念させられる。

「チッ」

男は後退しながらも傍に倒れている魔道兵から手槍を抜く。

「さあ、敵はどう動く？」

男の呟きに反応するかのように対岸側のバロム兵にも動きがあった。

歩兵隊と合流し一気に攻勢に出ていたバロム隊は後方の騒ぎに混乱する。

後方では突如現れた敵兵に苦戦を強いられている。トルワの声も聞こえなくなっていた。トルワがやられた事を知らないバロムの騎兵隊と歩兵隊は慌てて自分らの隊長の救出に向かう。

幸いにも敵小隊はバロム隊の攻勢に対して後退していたので、すぐに後ろを突かれる心配はなかった。

「トルワ隊長を救出するのだ!!」

一騎のバロム騎兵が駆け出すとそれに釣られて他の兵も駆け出す。一方、安全領域で一方的な魔法攻撃だけをしていたバロム魔道隊は突然の奇襲とトルワ隊長の死に浮足立っていた。位置的に敵である男に近い者は応戦をしていたが、それ以外の者はこちらに向かつて駆けてくる歩兵隊と騎兵隊を目にして、まずは身の安全をと合流をしようと小川を渡る。

混乱状態の魔道隊を助けようとする歩兵隊と騎兵隊、その二つの隊に助けを求めようとする魔道隊、バロム中隊を構成する三つの部隊の多くの者が小川の中で交差する。

バロム魔道隊を奇襲した男レオの編み出した作戦は

「……エルサンダー……」

成功した。

一筋の電光が先走り、その後、小川周辺が一瞬、轟音と閃光に覆われる。

バロム魔道隊の放っていた雷撃とは明らかに次元の違う威力だ。轟音と閃光の去った小川には骸^{むくろ}しか存在していなかった。

その凄絶な光景に運良く小川にいなかったバロム兵はおるかアルカディア兵すらも啞然としている。

戦場の静寂、本来ならば有り得ない現象を引き起こすほどに凄まじい雷魔法であった。

最初に動きを取り戻したのはやはりというべきか、レオである。

バロム中隊の生き残りは魔道隊の救援に向かわなかった騎兵と歩兵、レオと対峙している魔道兵と副隊長だ。

「う、うわああー!!」

部隊の壊滅により恐慌状態へとなった歩兵は閃光を放ったイレースに襲いかかるうとした。しかし、後方へは近付かせまいとセルクが阻止する。

眼に涙を浮かべながら武器を振り回す兵にセルクは軽く動揺する。今、バロム兵の中にあるのは恐怖心だけだと感じたのだ。

そこでバロム兵の片腕に焰が掠り、バロム兵が仰け反る。圧されていると判断したルシエラからの援護であった。

焰の熱気に当てられてセルクは動揺を押しつけ、身体を仰け反らせて隙のできたバロム兵を斬り伏せる。

バロム騎兵はギースとオゼロンの挟撃により倒されるのを攻撃を避ける最中に視界の端に捉えていたセルクはこれで戦闘は終わりだ

と、ホッと息をついた。
それがいけなかった。

「——セルク!!」

固まっている魔道兵を不意打ちで倒したレオは負傷しているバロム副隊長に手槍を投擲する。慌てて避ける副隊長に槍を突き出す。呪文を唱える隙など与えない。単調な突きはギリギリでかわされるがそのままの流れで体当たりを行い、態勢を崩させて今度は確実に腹に槍を突き刺した。

この時、もしレオが副隊長の喉を切り裂くか、肺がある胸を突き刺していたなら結果は変わっていたかもしれない。

腹に槍が突き刺さり倒れていく副隊長の虚ろな瞳に対岸でバロム歩兵に止めを刺している金髪の少年剣士が映った。

副隊長はほとんど無意識の中で少年剣士に手を向けて遺言を遺すように小さな声で唱えた。

「……ウインド」

己の中に残されたすべての力が込めた烈風が刃となり少年剣士へと一直線に飛ぶ。

レオは烈風の向かう先にいる者を目にして叫ぶ。

「——セルク——！」

「……え？」

完全に気の抜けていたセルクは自分へと迫り来る烈風の刃に対処できなかった。

目は瞑らない。過去に戦場で目を瞑った事をレオに叱られたからだ。

自分の胸を裂こうとしている烈風を黙って見ていた。が

「くっ——！」

セルクの前に人が立った。庇うために

素早く動いたために着ている赤いローブがはためき、長い黒髪は乱れた。

烈風の刃は切り裂く対象が変わっても構うことなく突き進む。

赤いローブを散らし、胸を上と下に裂き、背中の腰まで伸びた黒髪すらも切り、裂かれた胴体からはローブに負けないほどに紅い血が噴き出す。

そんな姿がセルクの頭に浮かび、目を瞑ってしまう。

が、想像した血が噴き出す音は聞こえずに、しばらくして代わりにきたのは叱責の言葉だった。

「戦場では如何なる時^{いか}も眼を瞑ってはいけない。あの男はそんな事も教えなかったのか？」

頭を本で軽く叩かれたかのような衝撃がくる。セルクが驚いて目

を開けると、そこには烈風の刃の直撃を食らったはずのルシエラが立っていた。

ローブの腹の部分が裂かれていたが、そこから見える肌には傷一つなかった。

セルクが自分の横腹の素肌を凝視している事に気付いたルシエラはローブを歪ませてローブの切れ目を隠した。

「どうやら魔法に関する知識に欠けているようだな、後であの男にでも聞くといい」

ルシエラはそう言い渡すと、杖を抱えて駆けつけてきたフィオリオーナに二人の無事を伝える。セルクはそのまま去ろうとするルシエラを慌てて引き止める。

「なんだ？」

「か、庇ってくれてありがとう」

セルクが礼と共に頭を下げた時、小川を渡ってレオが現れる。セルクの素直な礼に一瞬綻びしかけたルシエラの口元が引き締まった。セルクとルシエラの様子に事情を察したレオはバツが悪そうな顔をした。

「……すまなかった」

セルクと並んで頭を下げるレオにルシエラは軽く驚きの表情を作るがすぐに引っ込める。

「気にしなくていい。それよりもセルク殿には魔法の知識があまりないようだな？ 教えてやったほうが良いだろう」

許しの言葉を聞いたレオは顔を上げた。

「そうだな、セルク 魔法について教えてやるのか？」

セルクは視線をルシエラに向けて言った。

「魔法についてなら、魔法を使うシェラ姐ねえに聞いたほうがより詳しく聞けるんじゃないの？」

シェラ姐という単語にルシエラは眉を顰めたが、レオは気にせず
に肩を竦めた。

「ま、それが一番か、 というわけで頼まれてくれるか？」

と言いながら視線をルシエラに向けるレオに対してルシエラは渋
々といった様子で同意した。

「……いいだろう」

セルクは喜びの感情を顔に出しながらルシエラに質問をし出す。
それにルシエラは熟考しながら的確に答えていった。

質問と回答を繰り返す二人を槍に付いた血糊を拭い取りながら眺
めていたレオに今まで黙ってやりとりを見ていたフィオリオーナが
話しかける。

「セルクさんを取られて寂しいんですの？」

「そんなわけではないだろう」

顔をフィオリオーナに向けて問いをあっけなく否定したレオは、

ただ、と言葉を付け足す。

「俺はスオームでこの隊を離れようと思っている」

「……………え？」

あつさりと切り出してきた話の内容にすぐに反応できないフィオリオーナ。

「ちょっとした気紛れきまぐでここまで来たが、一国の御家騒動になんて関わりたくないんでな、だからスオームまで見届けたなら離れようと思っているんだよ」

衝撃を受けているのか、なにも言わないフィオリオーナから視線を再びセルクとルシエラへと向ける。

「だけど、セルクはどうなのかと思ってな、最初はなんとかして連れていくつもりだったが、…………情でも移っちゃったかな？ あいつが望むなら俺一人で抜けようと思う」

「……………一緒に護衛を続けるという選択肢はないんですの？」

悲しげな雰囲気を含んだフィオリオーナの問いにレオは意外そうな表情をフィオリオーナに向けながら首を横に振る。

「ないな、…………俺に拘こたわる必要などないだろう。戦力としても俺一人の力なんて乏とほしいもんだ。今回の戦闘だって俺がいなくてもギース殿ならきつと別の案を考えていたはず——」

「あなたは！！」

突然の大きめな声に目を見開くレオ。

「……………あなたは……………お兄様に似ているのです」

スキル説明

影：

戦場ならではの空気の中でのみ存在感を著しく無くすることができ
る。

武器説明

魔道書：

炎、風、雷、光、闇の五種類がある。基本は 〃〃〃 < エル
〃 < ギガ〃〃 < オメガ〃〃 と威力が増してゆく。しかし、
段々に制御が難しくなる。例外もある。

例：サンダー < エルサンダー < ギガサンダー < オメ
ガサンダー

例外：サンダーストーム

雷の遠距離魔法、かなり離れた目標を狙い当て
る事が可能。

第五幕 小川での開戦（後書き）

次の更新も遅れそうですが御許しを

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4243f/>

ファイアーエムブレム ~ 朱と蒼の黎明 ~

2010年10月10日01時07分発行